大　川　だ　よ　り

第１号（平成 23 年６月１日発行）
発行：大川活用プロジェクト
（事務局　守山市湖岸振興検討会）

大川の将来像をともに考えていきましょう

美崎自治会長　伊　藤　潔

自治会館から大川を望む（本年 5 月）

パリとセーヌ川、京都と鴨川、ローマとトレビの泉などはあまりに有名ですが、世界の多くの魅力あるまちには必ずといっていいほど川や水辺があります。

美崎もかつてはそうでした。大川には豊かな水流と川原があり、子ども達は水遊び、大人たちは投網打ちに興じました。無論たびたび洪水に襲われましたが、それも大水の時に橋板を撤去する木造の大川橋の存在とともに多様な関わりの一つの側面でした。

しかし、野洲川新川の通水とともに水は澱み、水草が繁茂する川となり、いつしか大川は人々と関わりのない忘れられた存在となりました。

今、大川の環境改善に取り組むとき、昔の姿の再現を目標とすることは現実的とは思えません。川原はなく、閉鎖的な水面となっていること、滋賀を代表する景勝地に位置し、周辺には大型ホテルやショッピングセンターが立地しているなどの現状を踏まえますと、大川の持つ可能性を見出しつつ、人々との新しい関わりの構築や魅力づくりが目標になります。

では、それはどんな姿なのか。まだ描けていませんし、モデルもありません。これから知恵を出し合い、議論をしていくなかで創り上げていく課題といえます。幸い守山市のご尽力で、京都大学生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所や立命館守山中・高校の皆さんとプロジェクトを組むことが出来ました。連携し、また助力をいただきながら一歩一歩進めていきたいと考えています。

さらに、今回の取り組みを通じて地域への関心が高まり、住民が一体となって全体的なまちづくりへと活動が広がることや、子ども達が環境への関心を高め、ふるさと意識を持つことになれば素晴らしいと思っています。

皆さんのご理解、ご協力をお願いします。

地域の力で水草刈りを実施（4 月 17 日）

「里川里湖（うみ）のまちづくり」

大川活用プロジェクトが発足、様々な取組が動き出しています

美崎自治会、京都大学生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所、立命館守山中学校・高等学校および守山市によるプロジェクト「里川里湖(さとうみ)のまちづくり計画」が動き出しました。

大川は、地域に密着した河川であり、守山市北部における大切な地域資源のひとつです。本取組は大川の環境保全とともに、河川環境を活用したまちづくりについて、しっかりと検討し、実現していくことを目的としています。

昨年から地域と市の共同による水草除去を実施し、京大ユニット、立命館も交えた現地調査や話し合いを重ねています。今年度、今後の長期にわたるこの取組の推進母体として、４者による枠組「大川活用プロジェクト」を立ちあげ、正式なプロジェクトとして位置づけました。既に完成している大川の船着場やこの「大川だより」の発行もこの取組のひとつです。

このプロジェクトでは大川を地域の暮らしに密接に関係している「里川」として、また、大川の河口を形成する琵琶湖沿岸のヨシ帯や雑木林とその周辺の水辺を「里湖」として再定義しています。

大川のもつ様々な側面、たとえば「景観」や「水質」、「生物環境」、更には地域の中で大川がどのような役割を担ってきたかをしっかりと見定め、再評価することから取組をスタートさせます。

そのことによって、「里川」としての大川に新たな価値を見いだし、「里湖」としての琵琶湖、更には周辺の様々な地域資源とともに、どのようなまちづくりが出来るかをじっくりと考え、一つひとつ実現していこうと思います。

なお、本年度は立命館や京大ユニット、守山市を主体とした環境等の基礎的な調査、自治会を中心とした大川への関心醸成のためのイベントやフォーラム等の実施、更には水草除去を中心に進めてまいきます。

それぞれの取組については、この「大川だより」のほか、自治会や市の広報等を通じてお知らせしますので、ぜひご参加ください。

（守山市みらい政策課　木村）

立命館による水質調査のようす（5 月 14 日）

メンバーコラム第1回 「大槌町で活動してきました」　　（守山市環境政策課　林）

4月 19 日から7日間、先の東日本大震災による津波で大きな被害を受けられた岩手県大槌町に市から派遣され、援助物資集積所で自衛隊と共に物資の受入や、被災された皆さんへの配給等の活動に従事してきました。▼人口 15 千人のうち、約 1 割の 1.6 千人が死亡、行方不明。町長をはじめ町職員も 32 人と約 1/4 を失い、役場機能も停滞。そのような中、自主的に隣同士や地域で助け合って避難生活をされている方も多数。▼高齢者や赤ちゃん等に配慮した食料等、地域の実情に合わせた要求リストの取りまとめや、集積所から避難箇所までの運送も自分たち自身の手で実施。運送には、津波から助かった自家用車を活用されていました。その姿に被災地でも芽吹き始めた『桜の花』のような命の力強さとコミュニティの絆の大切さを感じました。▼物資を積んで帰られる際、私たちにかけて頂いた「ありがとう」の一言が今も強く心に残っています。▼このコラムでは、プロジェクトメンバーが日ごろ感じている様々なことを交代でお伝えしていこうと思います。